

### ホーソン：「あざ」についての一考察

● 榊原 威 征

ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) は、短編作家から身を起こしたこともあり、生涯に亘って多くの短編小説を物している。それらの短編作品の中には芸術家や科学者を主人公にしたものが多く含まれているが、ホーソンの描く科学者と芸術家には共通する点が多々存在するというのが定説である。この二つの職業にはともに現実を超えて物を見る能力が必要であり、更に言えば、物理的な発明や想像的創造を通して新しい世界を構築する能力が必要なことから、共通点が多々存在することも頷けるところである。換言すれば、並外れた視点を開発し得た者のみが科学者や芸術家としての資格を具有するということなのであろう。

この両者には必ずや直面するに相違ないと思われる、共通する二つの危険性が存在する。その一つは、彼らが自分独自の特別な視点に没頭することで現実から遊離してしまうという危険性、二つ目は、自ら構築した世界の住人となってしまふことによつて、一般の人々との繋がりを失ってしまうという危険性である。言ってみれば、この二つの危険性は、頭（知）が心（情）を凌駕してしまうことによつて引き起こされる危険性と言つてよいであらう。実際、ホーソンの作品の中では、科学者と芸術家は常に孤高の理想主義者として描かれ、知的な意味で社会から孤立してしまつているのが常である。だがホーソンの彼らを見る眼は、反社会的な理想主義者を見る眼とは異なつているのも事実である。科学者の科学的立場というものは一般の人々のそれとは掛け離れているので、エイルマーやイーサン・ブランドやハイデガー博士が罰するに値するほどに冷たい客観的な人間として描かれていたのは驚くには当たらない。しかし、彼らの感情を形成する客観性は、彼らが夢を実現するための必要不可欠な根本的要素なのである。ホーソンのこれら三人を見る眼は、彼らが夢の実現を望む理想主義から必然的な孤立へと進むにつれて、徐々に非同情的なものへと移つてゆく。この三人を比較してみると、エイルマーが最も理想主義的である。本稿は、科学者エイルマーを主人公とした作品「あざ」を取り上げ、アメリカにおける評論の方向性を見定めながら作品分析を試みるものである。

さて、「あざ」のストーリーそのものは、それほど複雑な筋立てではない。登場する人物は三人、主人公エイルマーとその妻ジョージアナ、そしてエイルマーの助手アミナダブである。作品の舞台は18世紀後半のアメリカ社会である。いわゆる科学万能の時代であり、科学偏重の弊害が露呈した時代でもある。その時代にあつて、自然科学のあらゆる分野に通曉し一流の科学者として評判の高かつたエイルマーは、並みいる求婚者たちを押しつけて絶世の美女ジョージアナを口説き落とし妻に迎える。しかし、新妻ジョージアナの左頬についた痣が気になり、ついにはその痣をおぞましくさえ感じるようになる。もしその痣がなければ彼女は完全無欠の美女なのに…と考え、科学の力によつてその痣を取り除こうと決意するのである。夫の言葉を何度も聞かされていくうちに、ジョージアナは夫の言うことが正しいことのように思われてきて、痣の除去を自ら申し出る。エイルマーは不断の研究と努力を重ね、その結果ついに薬の製造に成功する。ジョージアナがその薬を飲むと、左頬の痣は見事に消失する。エイルマーの実験は成功したかに見えた。

しかし次の瞬間、ジョージアナは静かに息を引き取ってしまうのである。

これが作品の大体の骨子であるが、この作品を分析するに当たって、アメリカにおける評論家たちの多くは、エイルマーの人間性に焦点を当てて論評を施している。そして作品のテーマは、物語の最後に語り手がエイルマーについて述べる判断の中に要約されていると考えているようだ。語り手は、最後に次のように述べている。「このように、宿命的な猥雑な地上性は、なかば発展したにすぎぬこの茫漠たる地上にあってより高い完成を求める不滅の靈性に常変変わらず勝利を占めて、いつも歓喜するのである。だが、それでも、もしエイルマーがよりいっそうの深い英知に到達していたならば、彼の人間としての生活を天上の生活とまったくおなじ生地で織りあげたにちがいないあの幸福を、このように投げ棄ててしまう必要などなかったにちがいない。一時的な状況が彼には強烈にすぎたのであり、彼は、ほの暗い時間の領域の彼方を見つめて、断固として永遠のうちに生きつつ、現在のなかに完全な未来を見いだすことができなかつたのである。」<sup>1)</sup> この点に関して、評論家テレンス・マーチンは次のように記している。“As explicitly as a tale can, ‘The Birthmark’ tells us that to be is to be imperfect, that the price of human existence is imperfection.”<sup>2)</sup> マーチンのこの考え方に対しては、評論界の大御所と目される F. O. マシスン、ランダル・スチュアート、ハリリー・レヴィンなども賛意を示しており、地上における完全性へのエイルマーの執念は、物理的領域と天上的領域を混同してしまった結果であり、更に言えば、科学と宗教、頭（知）と心（情）をも混同した結果なのだと考えている。この考えに従えば、エイルマーの科学への愛は妻に対する愛を明らかに凌駕しており、物語の最後で彼が悲しむのは、妻を失ったことに対して悲しむというより、実験の失敗に対して悲しんでいると理解するのが妥当であろう。

エイルマーの地上における完全性に対する執拗なほどの執着は、心理上の不均衡の表れと見ることもできる。心理学的アプローチを試みる評論家たちはこの執着を、エイルマーが妻の性的愛情を受け入れることができないことの表れと見做している。そのうちの一人フレデリック・クルーズは次のように記している。“Aylmer’s desire to remove his bride’s flaw stems from revulsion against her sexuality.”<sup>3)</sup> もともとこの「あざ」という作品は、ホーソーンの多くの短編の中の代表作と位置付けられていることもあって数多の研究者によって様々な角度から分析がなされており、この心理学的アプローチもそのうちの一つの分析方法ということができが、心理学的アプローチによる作品分析は別の機会に譲るとして、本稿では採らないこととする。

エイルマーの妻ジョージアナは、物語が進展するにつれて重要な役割を演じるようになってゆく。彼女はエイルマーが到達し得なかつた「深遠なる知恵」を獲得するに至り、その故に、誇りが高く破壊的ではあるが理想主義的なエイルマーを、非難するより寧ろ賞賛することができるようになるのである。クレンス・ブルックスとロバート・ペン・ウォーレンは共著の中で次のように書き記している。“What the story emphasizes is not Aylmer’s self-conceit, but rather his possession of the questing spirit which will not resign itself to the limitations and imperfections of nature.”<sup>4)</sup> もしエイルマーが物理的事象と天上的事象とを混同しているならば、彼は愚かな科学者ということになる。しかし、己の道の実現を熱望し努力し続ける限り愚かということにはならないのではあるまいか。エイルマーに対するこの二様の見方は、物語中に散見できる。地上の不完全さの象徴である痣を取り除こうとするエイルマーを語り手は非難しているが、上述したように、ジョージアナは逆に称賛している。ここにおいて、ジョージアナの思いと語り手の思いとの間に齟齬が見られるのだ。作者であるホーソーンと登場人物が異なった見解を示す曖昧さはホーソーン作品の特徴なのであるが、その曖昧さを H. J. ラングは次のように説明している。“Aylmer is an

idealist, and he is absolved by the dying woman... This cannot be the last word, though ; it might induce people to improve their wives by surgery, at whatever risk. So we get the author's final comment that Aylmer had not reached a profounder wisdom.”<sup>5)</sup> ジョージアナにとって大切なのは、エイルマーが成功するかどうかではなく、目的に向かって邁進する彼の基本的な性格である。作品の中で、エイルマーについて相反する二つの考え方が描写されているのは、エイルマー自身についてのコメントというより、彼の性格についての相対的判断と解すべきであろう。エイルマーに対する見方について、一方は良く他方は悪いということではなく、二つの見方、即ち物理的な見方と精神的な見方があるということである。精神的な見方は、明らかに、エイルマーの犠牲者である妻のジョージアナに由来するのであり、物理的な見方は、語り手およびエイルマーの助手アミナダブに由来している。従って物語は、エイルマーという人間の善し悪しを判断しようとするものではなく、人間の夢と現実、言い換えれば、物理的事象と精神的な事象という相容れない要素に起因する悲劇を明らかにしようとするものと解すべきであろう。

エイルマーのジョージアナを見る眼は、物語の進展に沿って変化してゆく。妻への愛と科学への憧憬、そして遂には科学への想いが妻へのそれに勝ってしまうという事実が、物語の最初で語られている。「しかしながら、彼は科学の研究にまことに心底から没頭していたので、それ以外のどんな情熱によってもその研究から引きはなされることはついになかった。若い妻にたいする彼の愛が、科学に捧げた彼の愛にたち勝つこともありえたかもしれないが、それとても、二つの愛をからみあわせ、科学への愛の力を自分自身の力にむすびつけることによってしか、起こりえないことだったのである。」(p. 352) だが、エイルマーがジョージアナに求婚をした時、彼は一時的にはあったが科学から身を引いたことがあった。「助手の手にあとをまかせて実験室を出た彼は、整ったその顔についた炉の煤を拭いとり、指についた酸の汚れを洗い落として、ある美しい婦人に自分の妻になることを承諾させたのである。」(p. 352) しかしひと度結婚してしまうと、彼はまた実験室に戻ってしまう。一般論として言えば、科学の実験に対して人が抱く姿勢と、自分の妻に対して抱く姿勢には明らかな違いがある筈である。科学的実験の目的に対しては、人は一定の距離をおいた姿勢をとるものと考えられるが、自分の妻に対しては、完全にのめり込むのが普通の人間であろう。エイルマーの痣に対する執着は、彼が距離をおいて客観的に妻を眺め始めた証拠と言えはしまいか。嘗てジョージアナとの結婚を夢見た多くの若者たちは、彼女の痣など全く気にしなかったし、寧ろそれをジョージアナの精神的な強さの表れと見ていた。「ジョージアナの昔の恋人たちは、彼女が生まれたときになにかの妖精がその赤ん坊の頬に手をあてて、あらゆる男の心をこれほどに支配するようになる魔法のような資性のしるしとして、そこにその手型を残したのだ、と言ったものだった。」(p. 353) それに引き換えエイルマーは、何か奇妙な動物を見るような眼でジョージアナの痣を見た。一定の距離をおいたこの科学者の姿勢というのは、彼女を実験台にしようとするエイルマーの強い意思を説明している。エイルマーの感情は、この科学的客観性によって均衡を保っているのである。「エイルマーは、その存在の全価値がいま試されようとしているこの処置の結果如何にかかわっている人間にふさわしい表情を浮かべて、彼女の顔を見まもりながら、そのそばに坐っていた。しかしながら、こうした気分に変遷して、科学者の特徴であるあの哲学的な探究心が混じりあっていた。どんな微細な兆候も、彼の目は逃さなかった。頬の紅潮の高まり、ちょっとした呼吸の変調、険のふるえ、身体を走るほとんどそれとわからぬ痙攣——そうしたものを、彼は刻一刻と時間が経過してゆくにつれて、克明に二つ折りのノートに書きつけるのだった。」(p. 369) このようなエイルマーに対し、ジョージアナは自分を植物に例えて表現する。「あたしの身体じゅうの感覚が、日の入り時に薔薇の芯を包

みこむあの葉のように、あたしの精神を包みこもうとしているみたいなの。」(p. 369)

ジョージアナに対して見せるエイルマーの距離をおいた態度は、ジョージアナのエイルマーに対する尊敬から生じる親近感と対照をなしている。トーマス・ウォルシュは、二人の愛は否定的な結果を齎すと感じている。“Thus the love of Aylmer and Georgiana proves fatal to each other: the more she appreciated the loftiness of his aspirations, the more willing she is to risk her life, and the more willing she becomes, the more is he convinced of her moral perfection and of the need to effect her physical perfection by the removal of the birthmark.”<sup>6)</sup>更に、リチャード・ロビーも次のように述べている。“her fate, despite the conscious irony of her final remarks, is in part, a result of her own desires.”<sup>7)</sup>評論家ヴォン・エイベルだけは彼女の高まる愛情を肯定的に捉えているようだ。“She represents desirable actuality—the highest perfection of mingled earth and spirit—whereas Aylmer and Aminadab represent the two parts of man’s nature divided and opposed in intent, though technically cooperative.”<sup>8)</sup>

ジョージアナは物理的不完全さと精神的完全さとの融合を象徴するばかりではない。彼女は自分の肉体上の不完全さを認識し、その認識が精神的完全性の重要性に対する自らの考えを曇らせることはないのである。エイルマーは痣を見詰めてあれこれ言い、自分がジョージアナに与えている痛みには無頓着であるのに対して、ジョージアナは自分の痛みはさておき、自分がエイルマーに与えているかもしれない痛みに気を配るのである。そして彼女は、痣に対するエイルマーの見方を重要視するようになる。勿論彼女は、エイルマーが考えているほどに痣を悪いものとは感じていないのだが、二人が生産的な関係を保つためには、夫の言い分に従うしかない。彼女はエイルマーに向かって言う。「危険など、あたしにとってはなんでもありませんわ。だって、命なんて、このいとわしい痣のためにあたしがあなたの恐怖と不快の種になっているかぎりは一命なんて、喜んで投げ棄ててしまいたい重荷にすぎませんもの。」(pp. 356-7) ジョージアナのこの献身的な言葉にも関わらず、エイルマーは自分の考えていることを彼女に十分に伝えることをせず、彼女の肉体上の不完全さを治療しようとするのだが、彼女は彼の考えていることを見通している。彼の論文を読むことによってジョージアナは彼の大望を学び、かつその大望成就の不可能性をも学んでいるのである。語り手は、エイルマーの論文は「かつて人間の手が書き記した記録のなかでももっとももの悲しいものであった。それは、精神が土の重荷を負って物質のなかではたらくしかない合成物たる人間の欠点と、高貴な人間性が地上的な部分によって自分自身がまことに惨めにくじかれたことを知ったときに襲われる絶望の、悲しい告白であり、かつその絶えざる例証にほかならなかつたのだ。」(pp. 364) と主張する。だが、論文に対するジョージアナの反応は、まことに前向きなものであった。「ジョージアナは、読みすすみながらエイルマーを尊敬し、いままでになかったほど彼を愛するのだったが、同時に、これまでほどに彼の判断力に全幅の信頼をおくことができなくなるのだった。」(p. 364)

エイルマーはジョージアナの心の善性を十分理解しているのだが、それでも肉体上の不完全さに目を奪われざるを得ない。一方ジョージアナは、エイルマーの物理的な欠点を認識していながら、大望を遂げようとする彼の心を知るにつけ、彼を称賛せざるを得ないのである。ジョージアナの痣が美的見地からエイルマーを不快にさせているかもしれないが、同時に、エイルマーの欠点が彼女に絶大な危害を齎すかもしれないことを考え合わせれば、ジョージアナの寛容さは際立っていると言わざるを得ない。更に言えば、例え痣が取り除かれようとも、そのことが心からの満足を自分に齎すものではないことを彼女は知っているのである。それでも尚且つ彼女は、一瞬でも彼を幸せにできれば…と考える。将来のことは眼中になく、次のように思うのである。「彼

女は、ほんの一瞬でもいいから、彼のこのうえなく高邁深遠な意想を満足させてあげることができまうようにと、心の底から祈った。それが一瞬間以上に長くはつづきえないことを、彼女はよく知っていた、なぜなら、彼の精神はたえず前進し、たえず向上して、一瞬一瞬が前の瞬間の域を越える何物かを要求していたのだから。」(p. 367) ジョージアナはエイルマーの不完全さを認識しており、その彼の不完全さが彼女に危害を齎すであろうことをも認識しているのである。それでも尚彼女は彼を称賛し続け、彼の求めるものを満足させようと試みるのである。

上述の如く「瘧」のプロットは、ジョージアナとエイルマーのお互いに対する態度が変化する様子を中心に構成されている。エイルマーはジョージアナの容貌に重きをおいて彼女を見ており、物語が進行するにつれて二人の間に距離を置くようになる。一方ジョージアナは、エイルマーにより親近感を感じ、精神的な観点から彼を見ている。彼女は、語り手が物語の最後で語る態度を達成するが、皮肉なことに、そのことが彼女を死へと導くのである。

この作品に対してはこれまでに幾つもの解釈がなされてきたことは既に述べた。しかしどのような解釈であれ、エイルマーの性格について、或いは現実に対して想定される態度について、最終的な結論を導くことは甚だ難しい。物理的且つ实际的な観点から見れば、エイルマーは殺人を犯した犯罪者であるが、精神的な観点から見れば、彼は称賛すべき理想主義者なのであって、ジョージアナは不慮の事故で死んだに過ぎないのである。ジョージアナは高い精神性の持ち主でその観点からエイルマーを眺めており、従って死の間際まで彼を称賛する。このことが、一部の読者がエイルマーに対してある種の共感を覚える一因となっている。しかし、逆に、エイルマーを称賛するジョージアナの寛大さが、他の一部の読者のエイルマーに対する嫌悪を増大させているのも事実である。エイルマーの無分別さや大き過ぎる野心は、彼らの好むところではないのである。

ところで、エイルマーとジョージアナの関係と同じく大切なのが、エイルマーとアミナダブの関係である。ホーソンがここにアミナダブを登場させていることには意味がある。一面的な側面しか持たない助手のアミナダブは、エイルマーの指示のままに手足となって動く下働きであり、彼はエイルマーの溢れる想像力を理解することが出来ない。彼は世俗性を代表し、時間的存在にすぎず、あらゆる資質を欠いているが故に、「わしなら、あの瘧とおさらばするのはご免だわい」と独り言つ。また、エイルマーの実験が結果的に失敗に終わり、ジョージアナが最後の息を引き取るときには、アミナダブは下品なしわがれ声でクスクスと含み笑いをするのである。大井浩二氏が著書の中で、「ホーソンは二人の対照的な人物を導入することによって、エイルマーのめざすアダムの世界が、アミナダブの置かれている文明欠如の世界とは異質であることを暗示している<sup>9)</sup>と述べているように、ホーソンは二人を通して科学と自然の対立の構図を提示しているのである。

上述したことを総合的に勘案するならば、エイルマーは英雄なのか犯罪者なのか、についてこの作品は問うているのだと考えるのは早計であろう。もしそれを問う人がいるとすれば、彼はそのどちらでもあり、どちらでもない、と答えるしかない。この物語のテーマは、想像力と地上的出来事との融合不可能性、言い換えれば夢と現実との融合不可能性という悲劇なのである。知的傲慢に起因する彼の野心は決して実現され得ないというエイルマーの悲劇なのであり、あまりにも寛大過ぎるが故に死ぬ運命にあるジョージアナの悲劇なのである。アミナダブにとっては悲劇などというものは存在しない。何故なら彼は、悲劇を悲劇として感じるほどの繊細さを持ち合わせてはいないからである。

エイルマーとジョージアナの間に存在する相違は、作品中に描写されている二人の居住する部

屋にも反映されている。ジョージアナの住む部屋はお伽の国の部屋のようにあり、芳香が充満して現実味が薄く、次のように描写されている。「壁には豪華なカーテンがかけられていて、ほかのどんな種類の装飾もおよびもつかない華麗さと優美さの混じりあった効果をあたえ、天井から床まで垂れさがっているその豊かな、おもおもしろい襷は、角や直線をすべておし隠して、その場の光景を無限の空間から遮断しているように思われた。それは、ジョージアナには、ひょっとして雲のなかのパビリオンではないかと思われるほどだった。」(p. 359) ホーソーンはこの部屋をブドウワール (boudoir) と呼び、カーテンによって自然の恵みである太陽光線を遮断し、代わりにランプが人工の光を放っている。つまり、日常的な現実世界が締め出され、所謂隔離空間が造り出されているのだ。この部屋の中には、エイルマーに夢を与えた多くの書物と彼の過去の夢の記録が保管されているのである。

ジョージアナの部屋とは対照的に、エイルマーの実験室には美しいと呼べるものは何もなく、あるのは暑さと汚れと、そしてあのアミナダブである。「まず彼女の目に映ったのは、赤い炎が強烈な光を発している、あの熱い、情熱的な働き手である炉だったが、それは、その上方に付着しているおびただしい煤のために何百年も前から燃えつづけているように思われた。蒸留器が一つ、さかんに活動していた。部屋のあちこちにレトルト、チューブ、シリンダー、坩堝、そのほかの化学の研究に必要な器具がおいてある、一台の発電機が、いつでも使用できるように準備されていた。あたりの空気は胸を圧迫するようにむっとしていて、科学実験の過程で滲み出てきたガスの臭気に汚れていた。」(p. 365)

ホーソーンは、ここでも二つの部屋を並置して描写することで人工と自然の対立の構図を作り出し、エイルマーに自然への挑戦を試みさせたのである。人工とは文字通り科学のことであって自然とは対立関係にある。自然はもちろん創造主たる神の造り給うた創造物であって、自然を象徴する痣は有限の人間である証拠として神がジョージアナの頬に残したもののなのである。その痣を除去しようとする行為は、人間が神の領域に足を踏み入れる行為に他ならない。エイルマーは、ホーソーンが言うところの「許されざる罪」を犯してしまったのである。「知と情の不均衡が人間的共感を奪い、人間を社会から孤立させ、その孤立は人間をますますエゴチストにしてゆく」<sup>10)</sup> のが、「許されざる罪」を犯した者の結果であって、故にエイルマーの実験室で行われたあらゆる行為は、そもそもすべて失敗する運命にあったのだ。もしエイルマーが「深遠なる知恵」に到達していたならば、彼は自分の仕事の不可能性を認識出来たであろうし、現実に対して精神的スタンスで向き合うことで満足出来たであろう。しかし、彼の愚かさ、行き過ぎた理想主義が彼を不可能なことに挑戦させ、その結果妻を失うことになってしまったのである。

さて、この物語は、知的高慢によって引き起こされるエイルマーの悲劇であり、寛大過ぎるが故に死ぬ運命にあるジョージアナの悲劇である、と前段において書いた。では、ホーソーンが意図したこの物語のインプリケーションは何なのだろう。

恐らく、ホーソーンが意図した作品の意味を断定的に述べることは、非常な困難を伴う仕事である。というのは、彼のライティング・スタイルが“optional reading” (選択による任意の読み方) とか“multiple choice” (多肢選択の読み方) と呼ばれるものだからである。これは、ある出来事の解釈をただ一つに限定せず、複数の解釈の可能性をもたせて、どの読み方をするかを読者に任せてしまうというものである。ホーソーンが文学の特徴として“duplicity” (二元性) とか“ambiguity” (曖昧性) が挙げられるのは、この書き方に由来する。読者がどこに焦点を当てて読むかによって、作品の意味が微妙に変化するのである。その証拠に、これまでも社会学的解釈を提唱した論文もあり、またホーソーンがギリシャ神話について該博な知識を持っていたこ

ともあって神話的解釈がなされ、更には実存主義的解釈もなされている。その一つひとつはそれなりの説得力を示しているが、しかしホーソンがそのような読まれ方を期待してこの作品を物したとは到底思えない。何故なら彼の一貫したテーマは墮罪であり、罪の意味や墮罪と人間心理との関係を追及してきたのがホーソンなのである。従ってこの作品は、知のみを発達させた知的高慢な科学者が人間の限界を超えて地上における完全を追及するという悲劇的愚行を通してエイルマーの傲慢を戒め、墮罪によって不完全であるからこそ人間なのだということを教えているのである。これが、この作品の意味である。

#### 【注】

- 1) ナサニエル ホーソン. 『緋文字／美の芸術家』世界文学全集17、(集英社、1970) p.371. 作品からの引用はすべてこの版に依るものとし、以後本文中にページ数を以って表わす。
- 2) Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (New York, 1965), p.70.
- 3) Frederick Crews, *The Sin of Fathers: Hawthorne's Psychological Themes* (New York, 1966), p.126.
- 4) Cleanth Brooks & Robert P. Warren, *Understanding Fiction* (New York, 1943), p.108.
- 5) H. J. Lang, "How Ambiguous is Hawthorne?" *Hawthorne: A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, New Jersey, 1966), p.95.
- 6) Thomas Walsh, "Character Complexity in Hawthorne's "The Birthmark,"" *ESQ*, #23, (II Quarter 1961), p.15.
- 7) Richard Robey, "The Enchanted Ground: An Approach to the Tales and Sketches of Nathaniel Hawthorne," unpublished dissertation, Columbia University, 1966.
- 8) Von Abele, *The Death of the Artists: A Study of Hawthorne's Disintegration*, (The Hague, 1955), p.187.
- 9) 大井浩二 『ナサニエル・ホーソン論』(南雲堂、1974) p.82.
- 10) 小山敏三郎 『ホーソンの世界』(萩書房、1967) p.50.

#### 【参考文献】

##### I. 外国における参考文献

- Abele, Von. *The Death of the Artists: A Study of Hawthorne's Disintegration*. The Hague, 1955.
- Brooks, Cleanth. & Warren, Robert P. *Understanding Fiction*. New York, 1943.
- Crews, Frederick. *The Sin of Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. New York, 1966.
- Lang, H. J. "How Ambiguous is Hawthorne?" *Hawthorne: A Collection of Critical Essays* Englewood Cliffs, New Jersey, 1966.
- Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. New York, 1965.
- Robey, Richard. "The Enchanted Ground: An Approach to the Tales and Sketches of Nathaniel Hawthorne," unpublished dissertation, Columbia University, 1966.
- Walsh, Thomas. "Character Complexity in Hawthorne's "The Birthmark,'" *ESQ*, #23, II Quarter, 1961.

##### II. 日本における参考文献

- 小山敏三郎 『ホーソンの世界』 萩書房 1967.
- 大井浩二 『ナサニエル・ホーソン論』 南雲堂 1974.
- 坂本重武 『ホーソンの文学』 武村出版 1968.
- 周藤康生 『ホーソン研究』 大阪教育図書 1993.

辰巳慧『ラパチーニの娘』 晃洋書房 1983.

辰巳慧『ホーソーンの間論』 晃洋書房 1984.

ホーソーン, ナサニエル『緋文字／美の芸術家』世界文学全集17 集英社 1970.